

中学校体育における原因帰属様式, 授業満足感, 学習意欲の関係

The Relationship Between Attribution of Causality Styles, Satisfaction, Learning Motivation in Junior High School Physical Education Classes.

今田 有香* 中須賀 巧**
IMADA Arika NAKASUGA Takumi

本研究では, 体育授業における原因帰属様式, 授業満足感, 学習意欲の関係について検討することを目的とした。中学生を対象に, 体育の学習意欲検査, 体育場面の原因帰属様式尺度, 体育授業満足感尺度からなる質問紙を実施し, 欠損がなかった504名(平均年齢13.5±0.5歳)を分析対象とした。独立変数を原因帰属様式, 従属変数を学習意欲とし, それらを媒介する要因に授業満足感を位置づけたモデルを設定し, 共分散構造分析を行った。分析の結果, 成功事態に対する原因を能力, 努力, 教師, 調子に帰属した生徒は意欲的側面も高いことが確認された。また運や相手に帰属する生徒は回避的側面を促進することが確認された。失敗事態では, 調子や相手に帰属することが体育学習における意欲的側面を促すことが確認された。以上のことから, 成功・失敗事態において体育学習の意欲向上には, 能力や努力への帰属以外に教師や調子などへの帰属も有効なことが示唆された。

キーワード: 原因帰属, 満足感, 学習意欲, 中学生, 体育授業

I. はじめに

保健体育科の目標は, 「積極的に運動に親しむ資質や能力を育てる(旧学習指導要領, 1998).」, 「生涯にわたって運動に親しむ資質や能力を育てる(現学習指導要領, 2008).」と, 学習指導要領の改定ごとに目標も改定されている。新学習指導要領(2017)では, 「体育や保健の見方・考え方を働かせ, 課題を発見し, 合理的な解決に向けた学習過程を通して, 心と体を一体として捉え, 生涯にわたって心身の健康を保持増進し豊かなスポーツライフを実現するための資質・能力の育成を目指すこと」が, 目標として挙げられている。このような改定の経緯からみても, 生涯スポーツ実現や健康の保持増進のために, 体育授業を積極的かつ主体的に取り組むことができる力を生徒に身につけさせることは, 長年の課題であると考えられる。西田(2002)は, 学習意欲が高い生徒ほど, 黙々と練習を続ける傾向や, 活発に体を動かすなど, 体育授業で積極的な行動がみられることを報告している。このことから, 生徒が積極的かつ主体的な取り組みをするには, 学習意欲を高める必要があると考えられる。体育における学習意欲は, 体育授業中の学習活動を自発的・積極的に推進させ, それらの学習を一定の卓越した水準にまで到達させようとする心的エネルギーと定義され, 体育学習を促進させる意欲的側面(「学習ストラテジー」, 「困難の克服」, 「学習の規範的態度」, 「運動の有能感」, 「学習の価値」)と, 体育学習を阻害したり抑制したりする回避的側面(「緊張性不安」, 「失敗不安」)の2つの側面に大別されている(西田, 1989)。これまで, 体育における学習意欲研究は, 調査あるいは実践といった様々な研究手続きをとりながら多くの知見が蓄積されている。

例えば, 小学生から高校生を対象に学習意欲の発達の推移を検討した研究(西田・西田, 1990)では, 意欲的側面は小学生が中学生や高校生よりも有意に高い値を示し, 回避的側面は中学生が高校生や小学生よりも有意に高い値であることが報告されており, 児童期から青年期にかけて学習意欲は低下する傾向を示している。このような変動の原因として, 中学生・高校生における学習することへの価値観の低下や, 体育嫌いが小学生から中学生・高校生にかけて増えてくること, 自己認知に客観性がみられるようになることなどが挙げられている。また, 学習意欲を規定する要因を検討した研究(西田・澤, 1993)では, 体育学習の基盤であると思われる三次的要因の親子関係, 健康, 学習・運動環境は, 二次的要因である現在および過去の運動経験, 体育学習での対人関係(体育教師・友人との関係)を規定すると報告している。そして, 二次的要因が, 一次的要因である体育学習での成功や能力向上への期待および感情を支え, 期待(できそうな気がする, 得意になると思うなど)や感情(楽しい・嬉しいなど)は, 体育における学習意欲を強く規定していることが確認されている。このように, 意欲的・回避的といった質の異なる学習意欲は, 体育学習で経験する成功・失敗経験に対して生じる楽しさや嬉しさ, 悔しさといった生徒が持つ様々な感情によって喚起する。そして, 学習意欲が高まると学習行動が活発になり, その行動による学習結果が得られる。その時, 結果に対する教師あるいはクラスメイトからの評価や, 得られた成果について考えること(なぜうまくいかなかったのかなど)が, 感情に影響を与えられている(西田・澤, 1993)。しかし, 体育学習では経験した成功や失敗がな

* 兵庫県神戸市立鷹取中学校

平成30年7月11日受理

** 兵庫教育大学大学院教科教育実践開発専攻生活・健康・情報系教育コース 助教

ぜ起きたのか, 何が原因でそうなったのかについて考えさせる(振り返る)場面は必要であり, 単に成功・失敗経験に対する快・不快だけではなく, その原因から学習意欲の規定因を探る研究視点も必要になるのではないかと考える。

アメリカの社会心理学者である Weiner (1972) は, 成功・失敗経験したとき, その原因をどのように認知したのか4つの帰属様式(「能力」, 「努力」, 「運」, 「課題」)を用いて説明することができる原因帰属理論を提唱している。この4つの帰属様式は, 統制の位置(内的-外的)と安定性(安定-不安定)との2次元上に分類できる。統制の位置とは, その帰属要因が物理的な意味で行為者の内にあるか外にあるか問う分類概念として用いられており, 安定性とは, 帰属要因の時間的安定性・変動性に注目した次元である。例えば, 能力や課題の困難度は, 比較的变化しにくい安定的な要因として考えられる。一方, 努力や運などは, その時々によって変化する不安定な要因とみなすことができる。伊藤(1987)は, 体育・スポーツ場面の原因帰属様式を測定する尺度を開発しており, 特に体育学習では教師や生徒, 教材が複雑に関連しながら学習は進められることを理由に, 先述の4つと「教師」, 「相手」, 「調子」の3つを合わせた7つの帰属様式を提案している。これらの帰属様式と体育授業中の学習意欲との関係について検討している研究(伊藤, 1991)では, 成功の原因を能力と努力に帰属した児童ほど学習意欲も高く, 一方で失敗原因を能力に帰属した児童ほど学習意欲は低いことを報告している。このことから, 原因帰属様式と学習意欲は密接に関連していることが伺える。ただし, この結果が中学生以降の学年にも当てはまるとは限らない。なぜなら, 中学校以降の体育は教科担任制に伴う専門性の向上や運動課題の複雑性が高まることから, 小学校体育の様相と異なる。また, 中学生は小学生と比べ自己の有能さへの理解が深まり, 周囲あるいは過去の自分を基準とした自己の能力を客観的に認知できるようにもなり(西田・西田, 1990), 小学生と中学生の能力認知レベルが異なることも知られている。つまり, 授業の様相が異なることや児童・生徒間の発達を踏まえると, 体育授業における原因帰属様式と学習意欲との関係について検討する場合, 中学生に着目した検討も必要になるのではないかと考えられる。

ところで, 個人が良好な状態を維持・増進しながら活動するためには, 満足感といったポジティブな側面を向上させることも必要であり(島本・石井, 2007), 学習成果に満足感を抱く生徒は, 次の学習に対する意欲を喚起することも確認されている(磯野, 2004)。これらのことから, 学習に対する個人の満足感の高低は, 学習意欲の喚起に影響を与える要因になることが予想できる。また, 満足感と原因帰属様式との関連では, 中間試験の結果及びそれに対する生徒の原因帰属様式が感情を喚起し, その感情が学習行動を規定することを報告している(奈須, 1990)。体育・スポーツ場面でも, 成功・失敗の原因を何に帰属したのか, そして, その帰属した内容に

よって授業をどのように評価(満足感)するのかという仮定は, 生徒にとっては自然な認知経路と言える。したがって, 原因帰属様式と学習意欲に授業満足感を包括した関係について検討することも必要になるだろう。

以上のことから本研究では, 原因帰属様式, 授業満足感, 学習意欲の関係について検討することを目的とする。

II. 方法

1) 調査対象

中学生522名を対象に調査を実施した。回答に欠損があったものを除いた504名(男子254名, 女子250名, 平均年齢13.5±0.5, 有効回答率96.5%)を分析対象とした。

2) 調査時期

2017年2月下旬から3月中旬にかけて調査を実施した。

3) 調査内容

(1) 体育における学習意欲検査

西田(1989)によって作成された体育における学習意欲検査(Achievement Motivation in Physical Education Test: AMPET)を用いた。この測定尺度は, 意欲的側面(「学習ストラテジー」, 「困難の克服」, 「学習の規範的態度」, 「運動の有能感」, 「学習の価値」)と回避的側面(「緊張性不安」, 「失敗不安」)の2つの側面で構成されている。原案の尺度は, 64の質問項目を用いて児童・生徒の体育における学習意欲を自己評定させるものである。また, Nishida(2007)は, 調査協力者への検査時間による負担軽減を理由に小学生用の短縮版を作成している。そこで, 本研究でも調査協力者への負担軽減を考慮し, 同様の手続きのもと, 西田(1989)が提示する因子負荷行列の各下位尺度から負荷量の高い4項目を抽出し, 計28項目の短縮版を設定した(表1)。回答方法は, 各項目について「よくあてはまる」(5点)から「ほとんどあてはまらない」(1点)の5段階によって求め, 意欲的側面(5下位尺度の合計)の得点と回避的側面(2下位尺度の合計)の得点を算出した。

(2) 体育場面における原因帰属様式尺度

まず, 現在体育授業で行なっている運動種目での, 成功・失敗経験はどのような出来事だったかを1つずつ自由に記述させた。次に, その自由記述に基づき, 成功・失敗経験に対する原因をどのように認知しているのかを, 伊藤(1987)が作成した「体育・スポーツ場面における原因帰属様式尺度」を用いて評価させた。具体的な成功経験の項目は, 「もともと能力があるから(能力への帰属)」, 「頑張って努力(練習)したから(努力への帰属)」, 「運が良かったから(運への帰属)」, 「その運動種目が簡単だったから(課題への帰属)」, 「先生が上手に教えてくれたから(教師への帰属)」, 「相手(対戦相手)が下手だから(相手への帰属)」, 「体の調子(体調)が良かったから(調子への帰属)」の7つの帰属様式で構成されている。一方, 失敗経験の項目は, 「もともと能力がないから(能力への帰属)」, 「頑張って努力(練習)しなかったから(努力への帰属)」, 「運が悪かったから(運への帰属)」, 「その運動種目が難しかったから(課題へ

表1 体育授業における学習意欲検査

意 欲 的 側 面	学習ストラテジー 体育の授業では、上手にできる人のまねをするなど、いろいろと工夫している。 運動する時には、できるだけうまい人のやり方をまねるようにしている。 先生やうまくできる人のやり方をできるだけまねるようにしている。 体育の授業中、うまくできる方法をいろいろと工夫している。
	困難の克服 苦しい練習でも、うまくなるのなら頑張ることができる。 うまくなるために必要なら、きびしい練習にもたえることができる。 あれこれ考えるよりも、とにかく何回も練習する方だ。 運動が上手になるためには、何回もくり返し練習する。
	学習の規範的態度 先生や指導者の話をしっかり聞いている。 先生や指導者の注意には、素直に従っている。 体育の授業中、決められたことをきちんとと真面目に練習している。 みんなで決めたことはきちんと守って運動している。
	運動の有能感 人よりも運動神経がよいと思っている。 ほとんどの運動は、うまくできる自信がある。 どんな運動でも、たいてい人より上手にできる方である。 運動について優越感(人よりもすぐれている感じ)を持つことが多い。
回 避 的 側 面	学習の価値 運動が上手にできるということは、非常に大切だと考えている。 運動がうまくできることは、勉強がよくできることと同じくらい重要だと思っている。 運動がうまくできるようになれば、将来きっと役に立つと思う。 普段から運動がうまくできるようになればならないと思っている。
	緊張性不安 みんなの前で運動する時には、すぐにあがってしまう方である。 人が見ていると、心臓がドキドキしてうまく運動できない。 人に見られていると、すぐに緊張して思うように運動できない。 大勢の人が見ていると、体が緊張して、いつものプレーができなくなってしまう。
	失敗不安 運動会で走る時、負けるのではないかと心配で、その場を逃げ出してしまうことがある。 失敗することや負けることが気になるので、試合や競争はあまりやりたいとは思わない。 相手と競争する時、走る前から負けた時のことを心配してしまう。 試合中に1度も失敗すると、すぐに誰かと交代してもらいたい気持ちになる。

(西田, 1989を基に作成)

の帰属)、「先生が上手に教えてくれなかったから(教師への帰属)」、「相手(対戦相手)が上手だから(相手への帰属)」、「体の調子(体調)が良くなかったから(調子への帰属)」の成功経験の項目と同様7つの帰属様式で構成されている。回答方法は、各項目に対して、「そう思う」(5点)から「そう思わない」(1点)の5段階で評定するよう求めた。

3) 体育授業満足感についての項目

「現在の体育授業に満足しているか」という単項目に対して、「満足している」(5点)から「ほとんど満足していない」(1点)の5段階で評定するよう求めた。

4) 手続きおよび倫理的配慮

調査の趣旨および調査票の内容を学校長と保健体育科の主任教員に説明した後、調査協力の許可を得た。調査票の表紙には、調査がテストではないこと、学校の成績とは関係がないこと、個人の調査結果の秘密が守られていること、が明記されている。無記名形式で調査は行われ、質問項目への回答をもって同意取得とみなした。

5) 統計解析

モデル内の変数間の関連性は、構造方程式モデリングにより検証する。モデル採択の判断は、Goodness of Fit

Index (以下, GFI), Adjusted Goodness of Fit Index (以下, AGFI), Comparative Fit Index (以下, CFI), Root Mean Square Error of Approximation (以下, RMSEA) の各適合度指標をもとに行うこととし、それらの基準は豊田ほか(1992)と室橋(2003)に倣い、GFI および CFI は0.90以上、RMSEA は0.08以下、そして AGFI は GFI との差分が小さいこととした。有意水準 5%のもと、分析には統計パッケージの IBM SPSS Statistics 24.0ならびに IBM SPSS Amos 24.0が使用された。

6) 分析モデル

3つの変数間の関係を検討する際に用いられる、代表的な基本モデルの1つとして、Baron & Kenny (1986) の3変数システムモデルがあげられる。このモデルは、独立変数から従属変数への結果に至る過程において、媒介変数という概念を含め、その影響性について検討することを目的としている。図1に示すとおり、独立変数から従属変数(Path c)への直接的な影響と、独立変数から媒介変数(Path a)、その媒介変数から従属変数(Path b)への間接的な影響を想定している。この図1を参考に本研究の分析モデルを以下のように構成した。具体的なモデルの構造は、図2に示す通りである。まず体育授業場面での成功経験における原因帰属様式(「能力」、「努力」、「運」、「課題」、「教師」、「相手」、「調子」)から、意欲的側面へのパス、回避的側面へのパスを想定した。これらは、図1の関係モデル内のパスcにあたいするものである。次に、媒介変数として授業満足感を設定し、成功経験における原因帰属様式(「能力」、「努力」、「運」、「課題」、「教師」、「相手」、「調子」)から、授業満足感へのパスを想定した。これは、図1の関係モデル内のパスaにあたいするものである。続いて、授業満足感から意欲的側面及び回避的側面へのパスを想定した。これは、図1の関係モデル内のパスbにあたいするものである。なお失敗経験におけるモデルも上記同様に設定した。

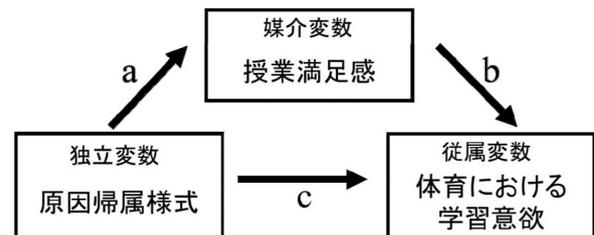
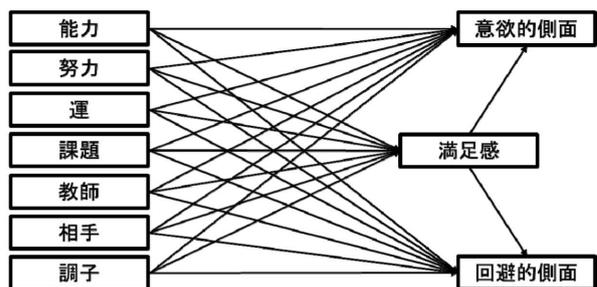


図1 原因帰属様式、授業満足感、学習意欲の3変数間の関係モデル



注)成功経験、失敗経験ごとに利用したモデル

図2 分析モデル

III. 結果

1) 各下位尺度の基本統計量

分析に先だって、各尺度の平均値及び標準偏差を表2に、相関係数を表3に示した。尺度間で認められた有意な相関係数は、意欲的側面は成功経験の能力 ($r=.40$)、努力 ($r=.46$)、課題 ($r=.13$)、教師 ($r=.28$)、調子 ($r=.28$) と、授業満足感 ($r=.40$) に有意な正の相関を示し、失敗経験の能力 ($r=-.19$) と有意な負の相関を示した。一方、回避的側面は成功経験の運 ($r=.16$) と失敗経験の能力 ($r=.25$)、努力 ($r=.19$)、運 ($r=.11$)、課題 ($r=.23$)、教師 ($r=.13$)、相手 ($r=.16$)、調子 ($r=.14$) に有意な正の相関を示し、授業満足感 ($r=-.17$) と有意な負の相関を示した。授業満足感は、成功経験の努力 ($r=.14$)、教師 ($r=.30$) と正の相関を示し、失敗経験の能力 ($r=-.21$)、教師 ($r=-.25$) と負の相関を示した。

表2 各尺度の基本統計量

	平均値	標準偏差
体育における学習意欲		
意欲的側面	69.10	14.27
回避的側面	21.52	7.93
原因帰属様式 (成功)		
能力	2.30	1.17
努力	3.69	1.16
運	3.23	1.28
課題	2.64	1.24
教師	3.52	1.17
相手	2.14	1.17
調子	3.05	1.34
原因帰属様式 (失敗)		
能力	3.09	1.28
努力	3.12	1.27
運	2.42	1.25
課題	2.84	1.24
教師	1.93	1.06
相手	2.94	1.29
調子	2.44	1.25
体育授業満足感	3.52	1.23

(n=504)

2) モデルの適合度について

構造方程式モデリングを行った結果、成功経験における原因帰属様式、授業満足感、学習意欲の関連に関するモデル (図3) の各適合度指標は GFI=1.00, AGFI=.97, CFI=1.00, RMSEA=.01であり、失敗経験における原因帰属様式、授業満足感、学習意欲の関連に関するモデル (図4) の各適合度指標は GFI=1.00, AGFI=.98, CFI=1.00, RMSEA=.00であり、両モデルのすべての指標において基準を満たす値が得られたことからモデルの適合は良いと判断された。

3) モデル内のパス係数について

ここでは、モデル内において認められた有意なパス係数について、成功経験を起点としたモデル (図3) 内の直接的・間接的な関連、失敗経験を起点としたモデル (図4) 内の直接的・間接的な関連の順に述べる。まず、成功経験における原因帰属様式、授業満足感、学習意欲のモデル内で直接的な関連を示すパス係数 (帰属様式→学習意欲) は、能力 ($\beta=.26$)、努力 ($\beta=.31$)、教師 ($\beta=.09$)、調子 ($\beta=.19$) が意欲的側面に正の影響を示し、運 ($\beta=-.10$) は回避的側面に正の影響を示した。次に原因帰属様式と学習意欲に授業満足感が媒介する間接的な関連を示すパス係数 (帰属様式→授業満足感→学習意欲) は、能力 ($\beta=.12$)、教師 ($\beta=.33$)、調子 ($\beta=.10$) が授業満足感に正の影響を示し、相手 ($\beta=-.10$) は負の影響を示した。そして、その授業満足感は学習意欲の意欲的側面に正の影響 ($\beta=.31$) を、回避的側面に負の影響 ($\beta=-.18$) を示した。なお、モデル内の説明力を示す決定係数 (以下「 R^2 」とする) の値は、意欲的側面は $R^2=.48$ 、回避的側面は $R^2=.08$ 、授業満足感は $R^2=.16$ を示した。

続いて、失敗経験における原因帰属様式、授業満足感、学習意欲のモデル内で直接的な関連を示すパス係数 (帰属様式→学習意欲) は、調子 ($\beta=.13$) が意欲的側面に正の影響を、能力 ($\beta=-.24$) は負の影響を示した。また、能力 ($\beta=.16$)、課題 ($\beta=.15$) は回避的側面に正の影響を示した。次に、原因帰属様式と学習意欲に授業満足感が媒介する間接的な関連を示すパス係数 (帰属様式→授業満足感→学習意欲) は、能力 ($\beta=-.23$) と教師 ($\beta=-.28$) は授業満足感に負の影響を示し、その授業満足感は学習意欲の意欲的側面に正の影響を ($\beta=.42$)、

表3 各尺度の相関係数

	原因帰属様式														
	成功経験							失敗経験							
	能力	努力	運	課題	教師	相手	調子	能力	努力	運	課題	教師	相手	調子	満足感
体育における学習意欲															
意欲的側面	.37**	.49**	-.16**	.12**	.34**	.06	.28**	-.30**	-.03	.03	-.04	-.06	-.03	.07	.46**
回避的側面	-.04	-.09*	.20**	.09*	-.04	.10*	.04	.27**	.10*	.13*	.26**	.12*	.21**	.17**	-.19**
授業満足感															
満足感	.10*	.20**	-.09*	-.05	.36**	-.08	.09*	-.24**	-.10*	-.08	-.10*	-.27**	-.06	-.10*	—

(n=504)

** $p<.01$, * $p<.05$

回避的側面に負の影響 ($\beta = -.13$) を示した。なお、 R^2 の値は、意欲的側面は $R^2 = .27$ 、回避的側面は $R^2 = .12$ 、授業満足感は $R^2 = .12$ を示した。

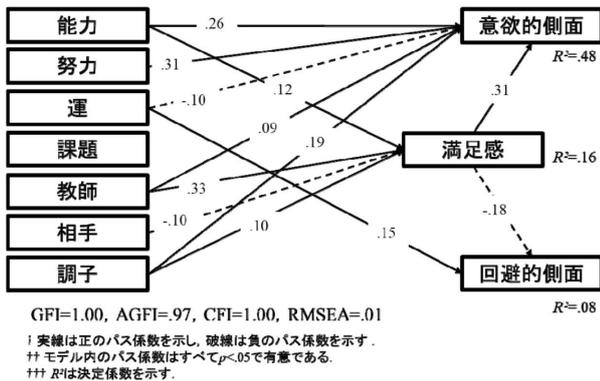


図3 成功事態に対する原因帰属様式、授業満足感、学習意欲の関係

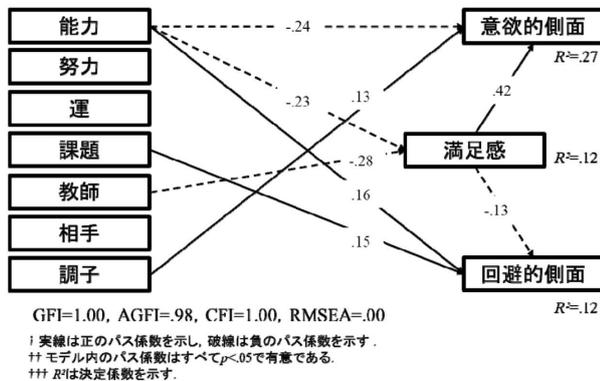


図4 失敗事態に対する原因帰属様式、授業満足感、学習意欲の関係

IV. 考察

本研究では、体育学習場面における生徒の原因帰属様式が学習意欲に与える直接的な関係と、授業満足感を介した間接的な関係について検討を行なった。

1) 成功経験における原因帰属様式、授業満足感、学習意欲の関係

成功経験における原因帰属様式、授業満足感、学習意欲の関係を(1)「能力」、「努力」、「教師」、「調子」への帰属について、(2)「運」と「相手」への帰属についての順に考察する。

(1)「能力」、「努力」、「教師」、「調子」への帰属について

「能力」、「努力」、「教師」、「調子」への帰属は、意欲的側面に直接的に正の影響を示した。これは、成功した理由を能力、努力、教師、調子に帰属している生徒ほど、学習を促す意欲的側面が高いことを示唆している。まず、原因帰属理論 (Weiner, 1972) において能力は、個人に内在するものであり、経時的な変化もみられにくい固定要因の一つに位置づけられている。また、能力が高いと認知している生徒は、直面する勉強や運動に対して自信をもって取り組んでいることが考えられる。つまり、成功した理由を自己の能力の高さに帰属させた生徒は、体育授業での活動に自信をもって取り組んでいる可能性があり、次もできるという自信が生徒の意欲を高めるので

はないかと考えられる。

次に、先述の理論において努力は個人に内在するものであり、「する・しない」というように個人差が生じる要因であり、固定要因の能力に比べて量的に変動する可能性がある。努力したから成功できたというように努力の重要性を理解している生徒は、成功するためにはどの程度の努力を有するか、何をしないといけないのかなど、成功するために必要なプロセスに努力量を位置づけている可能性がある。また努力同様、調子も個人に内在し、変動する要因の一つである。調子の良さを成功できた理由にしている生徒は、自己のスキルが最大限に発揮できるような調子がいい日もあれば、そうでない日もあることを理解している可能性がある。つまり、成功に向けた行動の仕方やそれに費やす量 (時間) を理解していること、そこには心身の調子を整えておくという自己コントロールができていたといった要因が備わることによって、生徒の意欲を高めるのではないかと推察される。また教師に帰属する生徒ほど意欲が高いことも確認された。これは教師と生徒の相互作用によって意欲が向上することを示唆している。また、これらの帰属様式のうち、「能力」、「教師」、「調子」は授業満足感に正の影響を示し、その授業満足感から意欲的側面に正の影響を示すこと、回避的側面に負の影響を示すことが確認された。これは、能力、教師、調子に帰属している生徒ほど授業にも満足しており、さらに意欲が向上するだけでなく、授業に対する不安傾向が抑制されることを示唆している。

このように、体育授業中の学習活動を促進する意欲を高めるためには、成功した理由を「能力」、「努力」、「教師」、「調子」に帰属することが重要である。ただし、これらの帰属様式のうち、「能力」や「教師」といった変動が困難な固定的概念への帰属を促すよりも、生徒自身が操作でき、次の学習活動への期待感を持たせることが可能な努力や調子に帰属することが望ましいと考えられる。

(2)「運」と「相手」への帰属について

「運」への帰属は直接的に意欲的側面に負の影響を示し、回避的側面に正の影響を示した。これは、成功した理由を運に帰属した生徒ほど、不安が高まり、学習活動が低下していくことを示唆している。運は、外的不安定な要因のため、次も成功するという保証があるかは分からない。そのため、成功するために何をしたらいいのかわからず、次は失敗するかもしれないといった不安が高まるのではないかと考えられる。

また「相手」への帰属は授業満足感に負の影響を示し、その授業満足感はい欲的側面に正の影響を示し、回避的側面に負の影響を示した。成功しても、その理由を相手に帰属した生徒は、相手が弱かったから、あるいは相手の調子がいつも通りではなかったからなど、自分 (自分たち) の実力ではなく、相手が抱える何らかの理由によって成功できたと考える可能性がある。そこでは、習熟したプロセスやアドバイスの活用といった学習活動と学習成果の結びつきが希薄化し、授業への満足も高まらず、

意欲向上に至らないのではないかと示唆される。

2) 失敗経験における原因帰属様式, 授業満足感, 学習意欲の関係

失敗経験における原因帰属様式, 授業満足感, 学習意欲の関係を(1)学習意欲の向上要因について, (2)学習意欲の抑制要因について, それぞれ順に述べる。

(1) 学習意欲を高めるパスの関連について

まず, 失敗経験における「調子」への帰属は, 意欲的側面に正の影響を示すことが確認された。これは, 失敗した理由を調子に帰属する生徒ほど, 学習意欲も高い値であることを示唆している。成功経験の考察の中でも述べているように, 「調子」とは個人に内在し, 良くも悪くも変動する要因であり, これに帰属する生徒は, 失敗したのはたまたま調子が悪かったからだと思える傾向にある。つまり, 技能が思うように発揮できなかったのは調子が悪かったからで, 調子を整えれば, 最大限の力が発揮でき, 思うように技能を遂行することができるという志向に至るのではないかと推測できる。そして, 成功に向かうための予測が立つため, 学習意欲を高く保つことができるのではないかと考えられる。

(2) 学習意欲を抑制するパスの関連について

まず, 直接的な関連では, 「能力」, 「課題」への帰属は, 回避的側面に正の影響を示し, さらに「能力」は, 意欲的側面に負の影響を示した。これは, 失敗した理由を能力, 課題に帰属する生徒ほど, 学習を抑制し回避的になり, さらに能力がないと認知する生徒は, 学習を促す意欲的側面も低く認知していることを意味している。成功経験の考察でも論じたように, 能力は個人に内在し固定化された要因であるため, 自己の能力の低さに帰属した生徒は, 球技に自信を持って取り組んでいない可能性があり, 自信のなさから学習への意欲が低下し, 次も失敗するかもしれないといった不安を高めたのではないかと推察される。課題は, 教師が提示する外的な要因であり, 課題の内容も日によって異なり変動する。そのため, 次にどのような課題を提示されるのか生徒は予測できず, 次はもっと難しい課題かもしれないといった不安が高まり, 学習への回避的側面が高まったのではないかと考えられる。

続いて, 間接的な関連では, 「能力」, 「教師」への帰属は, 授業満足感に負の影響を示し, その満足感から意欲的側面に正の影響を, 回避的側面に負の影響を示した。これは, 失敗した理由を能力, 教師に帰属し, 授業満足感を低く認知している生徒ほど, 意欲的側面は低く, 回避的側面は高いことを示唆している。失敗した理由を能力や教師に帰属する生徒は, 体育に対する自信のなさや教師のアドバイスを理解できなかったことが学習への意欲低下を促し, 次も失敗するかもしれないといった不安を高く認知するのではないかと考えられる。

V. 今後の課題

本研究の課題として, 以下の2点をあげる。一つは

体育授業で実施する様々な運動領域に着目した検討を行なう必要がある。体育授業には, 球技, 器械運動, 陸上競技, 水泳, 武道, ダンスというように運動特性が異なる様々な領域がある。例えば, 器械運動の演技や水泳のタイムが評価される種目とチームで取り組む球技種目では, 成功・失敗経験に対する捉え方も異なることが予想できる。もう一つは, 調査と実践の整合性について確認する必要があると考える。本研究の調査では, 体育学習における原因帰属様式が授業満足感と学習意欲を高める有効な知見を提供することができたが, 授業実践では本研究のように全体的なモデルの提示では拾いきれない生徒も存在することが予想できる。そのため, 本研究におけるモデルの有効性を実証するためには実際授業に介入し, 成功・失敗経験を授業終わりに振り返り, その原因をどの要因に帰属し, 学習意欲にどのような影響を与えるのかについて実践的な検討も必要になるのではないかと考えられるだろう。

VI. まとめ

本研究では, 原因帰属様式, 授業満足感, 学習意欲の関係について検討することを目的とした。本研究で示された結果は, 下記のとおりである。

- 1) 体育授業における成功経験の原因帰属様式と学習意欲の直接的な関係では, 「能力」, 「努力」, 「教師」, 「調子」への帰属が意欲的側面に正の影響を与えることを確認した。また「運」は意欲的側面に負の影響を与えることを確認した。間接的な関係では, 「能力」, 「教師」, 「調子」への帰属が授業満足感を高め, 意欲的側面に正の影響を, 回避的側面に負の影響を与えることを確認した。
- 2) 体育授業における失敗経験の原因帰属様式と学習意欲の直接的な関係では, 「調子」に帰属すると学習意欲に正の影響を与えた。一方, 間接的な関係では, 「能力」や「教師」に帰属すると授業満足感に負の影響を与え, その授業満足感から学習意欲に負の影響を与えることが確認された。

付記

本稿は第1著者の2017年度修士論文のデータを再分析し, 書き直したものである。また本研究の一部はJSPS科研費17K17881の助成を受けて実施された。

参考文献

- Baron, R. M. & Kenny, D. A. (1986) The Moderator Variable Distinction in Social Psychological Research: Conceptual, Strategic, and Statistical Considerations. *Journal of Personality and Social Psychology*, 51 (6) : 1173-1182.
- Bennett, J. A. (2000) Mediator and moderator variables in nursing research : Conceptual and statistical differences. *Research in Nursing and Health*, 23 : 415-420.

- 伊藤豊彦 (1980) 運動パフォーマンスにおける成功・失敗の原因帰属に関する研究. 体育学研究, 25(2): 105-111.
- 伊藤豊彦 (1987) 原因帰属様式と身体的有能さの認知がスポーツ行動に及ぼす影響—スポーツ行動に関する原因帰属モデルの検討—. 体育学研究, 31(4): 263-271.
- 伊藤豊彦 (1991) 体育学習場面における児童の原因帰属様式に関する研究. 島根大学教育学部紀要 (教育科学), 25: 31-37.
- 伊藤豊彦・島田正大 (1982) スポーツに対する原因帰属に関する研究. 島根大学教育学部紀要 (教育科学), 16: 43-48.
- 磯野美佳 (2004) 展示を意識した「書写」の教材開発・授業の展開—意欲と集中力を高め、学習効果を高める—. 広島大学附属中・高等学校中等教育研究紀要, 51: 85-92.
- 小塩真司 (2004) SPSS と Amos による心理・調査データ解析—因子分析・共分散構造分析まで—. 東京図書: 東京, 89-104.
- 文部科学省 (1998) 中学校学習指導要領解説 保健体育編.
- 文部科学省 (2008) 中学校学習指導要領解説 保健体育編.
- 文部科学省 (2017) 中学校学習指導要領解説 保健体育編.
- 室橋弘人 (2003) 分析のよさを評価する—適合度指標概論—. 豊田秀樹編 共分散構造分析 疑問編. 朝倉書店: 東京, pp. 122-125.
- 奈須正裕 (1990) 学業達成場面における原因帰属、感情、学習行動の関係. 教育心理学研究, 38: 17-25.
- 西田保 (1989) 体育における学習意欲検査 (AMPET) の標準化に関する研究—達成動機づけ論的アプローチ—. 体育学研究, 34(1): 45-62.
- 西田保 (2002) 体育における学習意欲診断システムの予備的検討—支持要因、学習行動の選好、学習意欲の類型化について—. 総合保健体育科学, 25(1): 45-58.
- Nishida, T. (2007) Diagnosis of Learning Motivation in Physical Education Test (DLMPET) and its Applicability to Educational Practice. International Journal of Sport and Health Science, 5: 83-97.
- 西田保・澤淳一 (1993) 体育における学習意欲を規定する要因の分析. 教育心理学研究, 41(2): 125-134.
- 西田保・西田紀江 (1990) 体育における学習意欲の発達の推移. 総合保健体育科学, 15(1): 47-54.
- 島本好平・石井源信 (2007) スポーツ経験とライフスタイルの因果モデル構成の試み. スポーツ心理学研究, 34 (2): 1-9.
- Snyder, M.L., W.G. Stephan, and D. Rosen field (1976) Egotism and attribution. J. Pers. Soc. Psychol., 33: 435-441.
- 高橋健夫・岡出美則・友添秀則・岩田靖 (2010) 大修館書店: 体育科教育学入門. 第 I 部: 43-44.
- 竹中晃二 (2002) 継続は力なり: 身体活動・運動アドヒアランスに果たすセルフエフィカシーの役割. 体育学研究, 47: 263-269.
- 豊田秀樹・前田忠彦・柳井晴夫 (1992) 原因をさぐる統計学 共分散構造分析入門. 講談社, pp. 174-177.
- Weiner, B. (1972) Theories of motivation, Rand McNally, 355-418.